童

2014 年 6 月 3 日.

水田には可愛い稲の赤ちゃんが植えられ、鏡のような田んぼはうっすら緑のカーテンがかかったような景色となりました。田植えはやはり里山の春を告げる風物詩ですね。
また、5 月の連休には見頃だったリンゴの可愛い花々も、いつの間にか小さなリンゴの実に変わっています。
そして、いよいよ草刈りも本格化してきます。涼しくなる朝夕にあちこちからビーバー（草刈機）の音が聞こえる季節になり、雑草といたちごっこの生活が始まります。

このように春の植物の成長は、まさに躍動感あふれるエネルギーそのものです。まるで幼児の成長と同じように思えます。 雑草もいつそんなに伸びているのだろうと思いますが、日毎に確実に背丈を伸ばしていく様子を見ると、子どもたちも確実に日々背丈のみならず、精神もしっかりと成長していっています。

1 年で 1 番躍動感あふれるエネルギーみなぎる季節です。大人も子どもと共に、情熱あるエネルギッシュな日々を送っていきたいものです。いつも申し上げていますが、子どもたちの成長環境に、エネルギー溢れる情熱的な人たちがたくさんいることが、将来のエネルギッシュで能動的に生きる人間になることは間違いありません。田植えや文庫まつりの大人も子ども達、そして、松岡先生も熱かったですね。

【お話とののはな文庫】

この童を書いている木曜日（29 日）の午後 8 時。電話が鳴り雄飛がでた。「松岡さんという人からだよ」と。一瞬「え！」と思ったが、もしかするとあの松岡享子先生かなと思い、電話に出るとやはり、東京子ども図書館でお世話になったお話の松岡先生であった。週末に大地へお邪魔したいという信じられないようなお電話であった。もちろん、日曜日の文庫まつりの事はご存じなかった。そこで、お祭りのことを伝えると、更に喜んで下さり、「またまた楽しみになったわ」とおっしゃって下さった。もちろんこの夜は、興奮のるつぼであった。

思い返せば 1 年前ののはな祭では、新館の建設地鎮祭が行われた。そして、その 2 年前ののはな祭では、焼失した旧ミズザクラの建設工事が着手された。このように、ののはな祭は、文庫の節目節目となってきた。そして今回。

新しい文庫のこけら落としは、松岡先生にお話してほしいと願っていたが、まさか実現するとは。2 日前には、文庫まつりの手作り品の中に、おはなしのろうそくのブックカバーを見つけ、これをぜひ松岡先生にプレゼントしたいなあと思っていたが、それがこのお祭りに来て下さるとは。

松岡先生が来て下さるのは、今回が 4 回目となる。初回が、妻の誕生日の前日であり、密かに先生にお願いして、旧ののはな文庫「みずざくら」で妻への誕生プレゼントとして、松岡先生にお話を妻に話して頂いた。妻にとっては、最高のプレゼントになった。
その後、大震災で被災地へ贈るトレーラーハウス図書館の建築依頼で大地へ、そして、秋のリンゴの収穫で大地へいらして子ども達と過ごされた。もちろん、その都度、日本最高のお話をプレゼントして下さった。旧文庫焼失の時には、先生のご自宅へ招かれ、先生の自著や翻訳の絵本をたくさん「持っていきなさい」とおっしゃり、ご寄附して下さった。

先生との出会いは、もちろん、私がお話を本格的に学ぼうと東京子ども図書館の研修生になり、東京子ども図書館へ出かけたのが最初である。それ以前では、絵本や児童文学書で１０冊に 1 冊ほどの確立で見かけるほど、先生の名前を知っていたし、妻からはすごい方だとは聞いていた。実際にお会いしてみると、純真爛漫で少女のような心とはじける笑顔、そして、透き通る声、もちろん造詣の深い文学論を持ち合わせる中で、私が最も魅力的に感じたのは、その子どものようにユーモア溢れる柔軟性のある遊び心と知性的ユーモアと子どもと大人の境目を感じさせない人格と世界であった。児童文学者と同時に、最高の保育者または教師だと思っている。

大地へいらして、子どもたちと一緒に過ごされた時も、眼をキラキラさせて子どもたちと一緒にお昼を食べたり、お話の部屋で「3 匹のくま」を子どもたちに話してくださり、そのあまりの迫力と面白さに、泣き叫びそうな子どももいたり（それでも今回は少し抑えたのよ！？）。五右衛門風呂もお気に入りで、早朝の夜明けから楽しんだり。「どこの文庫へ行っても、必ず自分の知らない本が必ずあるからその出会いが楽しみなのよ」とおっしゃり、ずっと本を読んでいたり。穏やかな時間を最高の感性でいつも楽しんでおられた。

毎月の東京子ども図書館でのお話講習会は、文字通り、講習生が交代で自分のお話を皆の前で発表して、その後先生たちからご指導ご指摘して頂く緊張かつ真摯な講習会であるが、松岡先生の器の大きい遊び心に甘えて、ギターで歌ったり誕生会をしたり、木工作品やろうそくを灯したりして、かなりはちゃめちゃな企画をして、勝手に盛り上げさせていただいた。いつも「やんちゃ坊主がすること」と大目に見て、きっとあきらめの境地で楽しんで下さったと、勝手に思っている。お話や児童文学や絵本について最高の学びを教えて下さる師であると同時に、人間としてのセンスやユーモア、遊び心、子ども心溢れる大人としても師として尊敬できる方である。

何と言っても、お話一つで、子どもも大人もその世界へ連れて行って下さる「ハーメルンの笛吹きネズミ男」のような魔女であることは間違いない。

家庭文庫である「ののはな文庫」は地味であり、目に見える成長をもたらすもののない場所である。もちろん、経済的効果も目で測れる地域発展の効果もないかもしれない。元々は、妻の絵本好きから蔵書を整理して、文庫のような形にして、身内に貸し出す事から始まった、自己実現のものである。だから、妻の人生そのものとして、応援したいと思ってきた。私は、絵本や児童文学には、全く縁遠かったが、仕事柄、絵本を読む機会が何十年もあったので、いつの間にか自然に読んでいる絵本はかなりの数になっていた。また、個人的には、児童文学は、４０代後半から読み漁るようになっていた。そして、お話を学び始めたと同時に、こののはな文庫活動にも、応援という形から、一緒に歩むというスタンスになった。加えて、旧文庫焼失を節目に、人の暖かさに触れ、絵本の持つ繋がりに感謝し、絵本やお話の世界が人間の成長や幅や器に大きな糧となることを学び実感し、絵本やお話わらべ歌を、大地の 3 本柱の一つにすることに決めた。
明後日の新館こけら落としでの松岡先生がどんなお話をして下さるか、そして、これが、今後の私たちの人生及び大地、ののはな文庫の学びの契機となるのか、ドキドキ楽しみである。
新館みずざくらが、100 人以上の人で溢れた。そして、子どもから大人まで、お話の世界、やかちゃんの世界に酔いしれた。波瀾万丈の文庫の歴史の思い出と共に、これからの更なる使命を確信した。その先には、松岡先生がいた。